

### 3-1 “新しい社会”をつくるために“新しい人”が求められる理由

〈目次〉

#### I、自分の意見を持った“新しい人”とは

#### II、自分のおかれている“世界”の正しい認識と“新しい人”が求められる理由

##### i、自分のおかれている“世界”の正しい認識

##### ①歴史の正しい認識の仕方について

その1 科学的歴史観

その2 科学的歴史観にもとづく考察のしかた

その3 新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機

##### ②今の社会はどのような社会なのか

##### ③世界はどのような方向に向かっているのか

ii、新しい生産様式の社会の息吹

##### ④これらから見えてきた、新しい生産様式の社会の息吹

iii、“新しい人”が求められる理由

##### ⑤“新しい人”が求められる理由

### 3-1 “新しい社会”をつくるために“新しい人”が求められる理由

#### I、自分の意見を持った“新しい人”とは

☆自分の意見を持った“新しい人”は、自然や社会についての正しい認識をもっていなければなりません。社会の問題に限っていえば、①人類の歴史はどのように進んできたのか、②今の社会はどのような社会なのか、③世界はどのような方向に向かっているのか、ということをしっかり認識して、今の自分の“世界”についての正しい認識を持つことが何よりも大切です。

そして、同時に同様に大切なのは、その熟慮された認識に基づいて、臆することなく社会と向き合うことのできる自律的な個人となることです。

それでは、その、「今の自分のおかれている“世界”についての正しい認識」は、どうしたら得られるのか、一緒に考えていきましょう。

#### II、自分のおかれている“世界”の正しい認識と“新しい人”が求められる理由

☆まずはじめに、①人類の歴史はどのように進んできたのか、②今の社会はどのような社会なのか、③世界はどのような方向に向かっているのかを見て、④これらから見えてくる新しい生産様式の社会について考え、⑤そこから必然的に導きだされる“新しい人”が求められる理由について、一緒に、見ていきましょう。

##### i、自分のおかれている“世界”の正しい認識

##### ①歴史の正しい認識の仕方について

☆歴史の正しい認識の仕方について、(その1) 科学的歴史観、(その2) 科学的歴史観

にもとづく考察のしかた、(その3) 新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機、という順序で見えていきます。

### その1 科学的歴史観

☆私たちの認識は、当たり前のことですが、外部にあるものが情報として能に入ることによって得られます。私たちが認識する世界は、「モノ」の本質であるアイデアなるものが「モノ」として現れたのでもなければ、神の力によって奇跡的にある日突然作られたのでもありません。存在するあらゆるものは、私たちの意識とは独立に存在していますが、合理的・必然的なものとして存在しており、私たちはその合理性・必然性を観察や実験を通じて明らかにし、科学を進歩させてきました。

そして、人類の歴史について、その合理性・必然性を発見し、人類の歴史の合理性・必然性を明らかにしたのが、マルクスでありエンゲルスでした。

そのことについて、エンゲルスは『共産党宣言』への序文で次のように述べています。「『宣言』(『共産党宣言』のこと——青山)はわれわれの共同の著作であるが、私は、その核心をなす根本的命題はマルクスのものであることをのべる義務があると思う。その命題とは次の主張である。いかなる歴史的時期においても、経済的生産と交換の支配的な様式、およびそれから必然的に生れる社会組織が土台をなし、その時期の政治的並びに知的歴史はこの土台のうえに築かれ、この土台からのみ説明される。したがって、人類の全歴史は(土地を共有していた原始氏族社会が崩壊して以来)、搾取する階級と搾取される階級、支配する階級と圧迫される階級とのあいだの抗争である階級闘争の歴史であった。そしてこの階級闘争の歴史は、次第に発展し、現在では、搾取され、圧迫される階級——プロレタリア階級——が、搾取し支配する階級——ブルジョア階級——の支配から解放されるためには、同時に、また究極的に、社会全体をあらゆる搾取、あらゆる圧迫、あらゆる階級的差別、あらゆる階級闘争から解放しなければならない段階に達している。

この命題は、私の考えによれば、ダーウィンの学説が生物学に対してなしたことを、歴史学に対してなすべきものであるが、われわれはふたりとも、1845年の数年前からだんだんこの命題に近づいていた。私が独力でどの程度この方向に進んでいたかは、私の『イギリスにおける労働者階級の状態』にもっともよく示されている。だが1845年の春、私がブリュッセルでマルクスに再会したとき、かれはこの考えを完成していて、それを、私がここにのべたのとほとんど同じように明瞭な言葉で私にのべた。」(エンゲルス『共産党宣言』(1888年英語版への序文)岩波文庫、大内兵衛・向坂逸郎訳 \*『イギリスにおける労働者階級の状態』は1844年に書かれた。)

このマルクスとエンゲルスの歴史の見方は、「唯物史観」とも「史的唯物論」とも呼ばれていますが、1859年6月刊行の『経済学批判』の「序言」で、マルクス自身が要点を簡潔に述べていますので掲載します。

「物質的生活の生産様式が、社会的、政治的および精神的生活過程一般を制約する。人間の意識が彼らの存在を規定するのではなく、逆に彼らの社会的存在が彼らの意識を規定するのである。社会の物質的生産諸力は、その発展のある段階で、……既存の生産諸関係と、……所有諸関係と矛盾するようになる。これらの諸関係は、生産諸力の発展諸形態からその桎梏に一変する。そのときから社会革命の時期が始まる。」

そして、このマルクス・エンゲルスが発見した人間の歴史についての科学的見方は、マ

ルクス自身が資本主義社会を研究するうえでも、その導きの糸として欠くことのできないものとなりました。

## その2 科学的歴史観にもとづく考察のしかた

☆エンゲルスは、この科学的歴史観について、「マルクスによって 1845 年になされた『どこでもいつでも政治的な状態や事件はそれに対応する経済状態によって説明される』という発見。」(エンゲルス『資本論』第3巻の序文)と述べて、「経済状態、——資本の行動とその結果——によって、そのときの「政治的な状態、——労資の力関係の現状と支配階級の政策の方向——が支配されることを確認しています。だから、私たちは、今の日本を考察するにあたって、「資本の行動とその結果」をしっかりと見なければなりません。そのこと抜きに、ただ「賃金を上げろ」とだけ、オウムのように言い続けるだけではダメです。

そして、レーニンは、このような科学的歴史観にもとづく考察のしかたについて、「マルクス主義の全精神、その全体系は、おのおのの命題を、(α) 歴史的にのみ、(β) 他の諸命題と関連させてのみ、(γ) 歴史の具体的経験と結びつけてのみ、考察することを要求しています」(第35巻『111 イネッサ・アルマンドへ』1916年11月30日に執筆P262~263)と述べて、物事を考察するにあたって、①歴史的に②他の諸命題と関連させて見ることを求めています。このことをまったく理解できない(まったく理解しようとしない?) 不破さんは、マルクスを「恐慌=革命」論者だったとして誹謗(\*1)したり、「レーニンの荒れた時期」(\*2)などと情勢を無視してレーニンにレッテルを貼るのに都合の良い文章を切り貼りしてレーニンを誹謗します。

※なお、(\*1)の詳しい説明は、[ホームページ 4-19](#)「☆不破さんは、マルクスが 1865 年に革命観・資本主義観の大転換をしたという、レーニンも気づかなかった大発見を、21 世紀になっておこない、マルクスの経済学をだいなしにしてしまった。」を、(\*2)の詳しい説明は、[ホームページ 4-13](#)「☆レーニンの資本主義観、社会主義経済建設の取り組み、革命論への、反共三文文筆家のような歪曲と嘲笑、これでもコミュニストか」を、参照して下さい。

このように、科学的歴史観は、それぞれの時期(時代)の政治的な状態や事件とそれに対応する経済状態等を歴史的に考察し、その成り立ちをしっかりと掴むことによって、誤った考えに陥ることなく、正しい認識を得るための「導きの糸」とすることができます。

## その3 新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機

☆マルクスは『資本論』第一部「第一三章 機械と大工業」の中で、資本主義の発展が「生産過程の物質的諸条件および社会的結合を成熟させるとともに、生産過程の資本主義的形態の矛盾と敵対関係を(成熟させ——青山加筆)、したがってまた同時に新たな社会の形成要素と古い社会の変革契機とを成熟させる」ことを述べていますが、科学的歴史観は、何が「新たな社会の形成要素」で、何が「古い社会の変革契機」であるかを明らかにします。

科学的歴史観は、資本主義的生産様式の世界における「新たな社会の形成要素」とは、生産過程の諸条件と社会的結合の進展による生産手段の集中と労働の社会化(=生産の社会的性格)による生産力の発展とそのより一層の発展可能性のことで、「古い社会の変革契機」とは、生産過程の資本主義的形態——私的資本主義的分配と資本主義的生産関係——

一の矛盾と敵対関係のことで、その深化・成熟が「新しい生産様式の社会」をつくるための原因と原動力であることを明らかにしています。

つまり、「新たな社会の形成要素」とは、資本主義的生産様式における**私的資本主義的性格をもった**、技術的進歩であり、それを基礎とする社会的生産の進展のことで、「古い社会の変革契機」とは、**私的資本主義的性格による**、社会的な欠落面・限界のことで、科学的歴史観は、資本主義的生産の発展が、この「新たな社会の形成要素」を発展させ、それがまた、「古い社会の変革契機」を発展させることを明らかにしました。

だから、「新たな社会の形成要素」がどのように形成されたか、つまり、資本がどのような行動をし、その結果、社会がどのように変化したかということを、しっかり見るのが重要です。

そして、資本主義的生産様式の社会において、「新たな社会の形成要素」を生み出し、「古い社会の変革契機」を担う、その中心にいるのが労働者階級なのです。

## ②今の社会はどのような社会なのか

☆私たちは、「今の社会はどのような社会なのか」ということを、最初のページ 1「今を検証する」で見してきました。

私たちは、このページ群で、日本資本主義はどのように発展してきたのかを、1970年代から現在までの財界（資本）と政府の動きと、この間の社会・経済に係わる統計数値等を一瞥・概括し、産業の空洞化、不安雇用・非正規雇用の増大、貧困化と格差の拡大、社会保障の危機、少子化、等々はなぜ起きたのかを、みなさんと一緒に見してきました。

まだお読みでない方は、この機会に、是非、お読み下さい。

[サイト 1：「今を検証する」の各ページを簡単に紹介します。](#)

### 1-1 日用品が充足され、豊かさを感じはじめた時から、日本社会の深刻な変化が始まった

☆このページは、「資本主義の「黄金時代」から「日本資本主義の終わりの始まり」、までの流れを簡単に見て、2020年までの日本経済の推移を示す幾つかの数値を提示します。

### 1-2 2015年8月からタイムマシンに乗って遡る

☆2015年8月は、このホームページを作成しはじめた時です。なので、まず始めに、2015年現在の日本経済を見て、タイムマシンに乗って1955年まで遡り、続けて、2021年末の日本経済の断片を垣間見ます。

### 1-3 今の日本の経済を動かす力

☆まず始めに、資本主義的生産様式の社会の生産のしくみを極々大雑把に見て、これを踏まえて、前のページ 1-2「2015年8月からタイムマシンに乗って、日本を遡る」で見たものの意味を明らかにします。そして、「ミネルバの梟は黄昏どきに飛び立つ」という言葉の意味を噛みしめます。

### 1-4 70年代の始め以降、財界が進めた政策

☆このページは、〈70年代の始め以降、財界が進めた主な政策〉を見て、資本の国内の雇用や産業を犠牲にして海外での利潤拡大を図るという一貫した戦略が、今の日本(日本国民)の危機を作り出してきたことを明らかにし、資本の悪事を暴いて、資本と闘う以外に日本再生の道はないことを訴えています。

### ③世界はどのような方向に向かっているのか

☆私たちは、「世界はどのような方向に向かっているのか」ということを、2番目のページ2「二一世紀は何処に向かって進んでいるのか」で見てきました。

私たちは、このページ群で、資本主義社会での「民主主義」や「自由と平等」の問題を含め、「資本主義的生産様式の社会」とはどのような社会なのかを再確認し、「二一世紀は何処に向かって進んでいるのか」を多面的に見るなかで、「経済は社会のため、国民のためにある」という当たり前の社会はどうすれば実現できるのかを、みなさんと一緒に見えてきました。

まだお読みでない方は、是非、この機会にお読み下さい。

[サイト2：「二一世紀は何処に向かって進んでいるのか」の各ページを簡単に紹介します。](#)

#### 2-1-1 「“経済は国民のため、社会のためにある”と考える人たちは社会主義者？」

☆資本主義の仕組み、限界と「新しい生産様式の社会」への展望を見るページです。

#### 2-1-2 「「資本」のための経済から「人間」のための経済へ」

☆このページは「“経済は国民のため、社会のためにある”と考える人たちは社会主義者？」のより詳細なバージョンです。

#### 2-1-3 「現代の資本主義が準備する新しい生産様式の社会」

☆「資本」のための経済から「人間」のための経済への転換の条件をみます。

#### 2-1-4 「「資本主義的生産様式の社会」と「ポスト資本主義社会」との違いとは」

☆それぞれの「生産様式」のもつ法則に基づき、「産業」と「労働」の面からその違い明らかにし、「新しい生産様式の社会」の優位性を検証した。

#### 2-1-5 「「資本主義的生産様式の社会」に変わる“新しい生産様式の社会”とは」

☆主権者である国民が創る「新しい生産様式の社会」とは、どのような社会なのかを見ていきます。

#### 2-1-6 二一世紀はどこに向かって進んでいるのか

☆国連は世界をどのように「変革」しようとしているのか、ダボス会議は資本主義的生産様式をどのように「リセット」しようとしているのかを一瞥し、社会のあり方を考えます。

#### 2-1-7 “社会のあり方”と“自由と民主主義”の現在・過去・未来

☆資本主義社会における「自由」の特徴と「民主主義」の限界を明らかにし、「新しい生産様式の社会」における「自由」と「民主主義」との違いを見ていきます。

#### 2-1-8 SDGsが実現される社会とは

☆国連がめざすSDGsとは、そして、国連がめざすSDGsはどうすれば実現されるのかを、一緒に考えます。

#### 2-1-9 資本主義社会とはどのような社会なのか

☆「自由」な「契約」によって成り立っている資本主義社会とは、どのような社会なのかを、丸裸にするページです。

### ii、新しい生産様式の社会の息吹

#### ④これらから見えてきた、新しい生産様式の社会の息吹

☆私たちは、上記の考察を通じて、世界と日本を新しい生産様式の社会へ導く「新たな社会の形成要素」と「古い社会の変革契機」を見てきました。

もう一度、簡単に見てみましょう。

資本主義的生産の発展による、新しい生産様式の社会へ導く「新たな社会の形成要素」とは、「生産諸力」の発展と「生産過程の社会的結合」の発展とによる社会的生産の飛躍的な発展のことで、資本による「生産諸力」の無秩序ですさまじい発展は、国連に「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための 2030 アジェンダ」を採択させ、貧困や飢餓、エネルギー、気候変動、平和的社会など、持続可能な開発のための「持続可能な開発目標(SDGs)」を要求し、資本主義的生産様式のもとでの「生産過程の社会的結合」の発展は、世界経済フォーラム(WEF)のクラウス・シュワブ会長をして、「世界の社会経済システムを考え直さないといけない。第2次世界大戦から続く古いシステムは異なる立場のひとを包み込めず、環境破壊を引き起こしている。持続性に乏しく、もはや時代遅れとなった。人々の幸福を中心とした経済を考え直すべきだ」「次の世代への責任を重視した社会を模索し、弱者を支える世界を作っていく必要がある」、「自由市場を基盤にしつつも、社会サービスを充実させた『社会的市場経済(Social market economy)』が必要になる。政府にもESG(環境・社会・企業統治)の重視が求められている」とまで言わしめ、「新たな社会の形成要素」である社会的生産の発展は私的資本主義的生産様式との矛盾を益々明らかにしています。

そして、資本のグローバルな展開は、「産業の空洞化」をもたらし、中間層の没落をもたらし、社会全体の危機を深め、「古い社会の変革契機」を生みだしています。

日本国内に目を移せば、高い生産性を獲得した富の源泉である製造業が海外に出て行った結果、生産性の低いサービス業の比重が増し、経済の低成長と低賃金が長期にわたって続き、その結果、年金・福祉・医療の基礎が掘り崩され、社会的分業の恩恵を受けることを前提に暮らしが成り立つ労働者階級は、生きる術がなくなりつつあります。

これらの結果、産業の空洞化により労資の力関係は労働者階級に対する資本の優位はあるものの、貧富の差は拡大し、「古い社会の変革契機」は間違いなく増幅し続けています。社会の資本主義的な外皮(=「資本主義的私有」、つまり「取得の資本主義的形態」)への疑問、経済は誰のためにあるのか、企業は誰のためにあるのかという根源的な問いかけ、生産の社会的性格と取得の私的資本主義的なあり方を問う声が、まだ、朝の小鳥のさえずり程度の音量ではあるが、広範に聞こえ始めています。

※国連の「2030 アジェンダ」と「世界経済フォーラム」とに関する詳しい説明は、前掲のホームページ 2-1-6 「二一世紀はどこに向かって進んでいるのか」及びホームページ 2-1-8 「SDGs が実現される社会とは」を参照して下さい。

iii、「新しい人」が求められる理由

⑤「新しい人」が求められる理由

このように、「経済は社会のためにある」ということを最優先に考えなければならない時代に来ていることを、世界の人々(人民)が強く認識しはじめています。

そして、「経済は社会のため国民のためにある」という社会は、私的「資本」が生産と社会を支配し、私的「資本」が大きくなることによって経済が発展するという特徴・法則をもつシステムの資本主義的生産様式の社会を「経済は社会のため国民のためにある」という命題を実現することの出来る「新しい生産様式の社会」に置き換えなければ実現しま

せん。

レーニンは、ロシア革命の前に書いた『ペ・キエフスキー（ユ・ピャタゴフ）への回答』（1916年8月~9月に執筆 全集 第23巻 P16~20）で、「資本主義と帝国主義を打倒すること」は「経済的変革によってのみ可能である」こと、「しかし、民主主義のための闘争で訓練されないプロレタリアートは、経済的変革を遂行する能力をもたない」ことを述べ、「ブルジョアジーから奪いとった生産手段にたいする、全人民の民主主義的管理を組織することなしには」、「全勤労大衆の国事参加を民主主義的に組織する方向にむかわせることなしには」、資本主義に打ち勝つことができないことを述べていますが、私たちがめざす「経済は社会のため国民のためにある」という「新しい生産様式の社会」は、政治がほんとうに「民主的」であるだけでなく、生産関係そのものが「民主的」でなければならず、企業が民主的に運営されていなければなりません。

このような社会は、これまでになかった社会です。だから、労働者階級はこれらのことをしっかり理解し、本当の社会の主人公としての民主主義者に、「新しい人」に生まれ変わらなければなりません。そして、そのような「新しい人」によってしか「新しい社会」はつくることができません。

それではどうしたら「新しい人」はつくられるのか、次のページで見ていきましょう。